

国際共修型多文化クラスにおける平等な参加を目指す言語アプローチ¹

—やさしい日本語、複言語資源の活用—

山田 悦子(北海道大学)

1. 多文化クラス(国際共修型クラス)

本発表は、日本の大学の多文化クラス(交換留学生と日本語母語話者(学部生)が共に学ぶ国際共修型授業で、言語教育の授業ではない)での、クラス内での使用言語を巡る問題への取り組みについての実践報告である。英語による多文化クラスと日本語による多文化クラスの双方を、長年、担当してきたが、言語の問題は多文化クラスの課題の一つとして、よく指摘されている。非母語話者の履修に際しての言語要件を、外国語試験を目安として設定し、履修者を制限していても、母語話者と非母語話者との言語レベルの差異のみならず、非母語話者間でも言語スキルの差異が見られる場合が多い。担当してきた多文化クラスでは、学問的な知識の教授よりも、比較的少人数のクラスにアクティブラーニングやプロジェクト中心の PBL を取り入れ、参加者同士でのインターアクションやグループワークを中心とした活動を展開することが奨励されているため、言語の問題の活動への影響は大きい。この言語の問題は、日本語による多文化クラスよりも、英語による多文化クラスでより顕著で、以下で述べる概念を段階的に導入し、問題の軽減を試みた。

2. 英語による多文化クラスにおける言語使用への心理障壁を軽減する試み

英語による多文化クラスでは、英語の口頭運用能力が高い留学生を中心に回ってしまい、高い英語力の非母語話者であっても、特に日本語母語話者の学生は有意義な参加ができない状態がよく発生していた。同様の現象は日本の多くの教育機関でも発生していると考えられる。これは、日本語母語話者が英語を話す力が弱いためだと解釈されることが多い。しかし、日本語による多文化クラスと英語による多文化クラスの比較を行った発表者の過去の研究によると、日本語による多文化クラスで、日本語母語話者の学生は、英語による多文化クラスとは大きく違い、積極的に発言するものと予想していたが、議論を主導する行動は少なく、周りを気遣いながら控えめに参加するという傾向が見られた。このことから、英語による多文化クラスにおいて、日本語母語話者の学生が上手く参加できないことが多いのは、英語の口頭運用能力の弱さだけが原因ではなく、母語であっても話し合いの場での積極的な自己表明への抵抗がある傾向に、外国語である英語を使用する言語不安が加わるからではないか、つまり、「心理的な言語障壁」が一番大きな問題点であると考えられた。

よって、心理的な言語障壁を多文化クラスの多様性の特性を活かして軽減する方法について、取り組むことにした。その空間に参加する話者の平等性に関係する概念である「リンガフランカとしての英語」、「やさしい日本語」、「複言語資源の活用」を、英語による多文化クラスに取り入れることで、どの様に変化するのかを追究した。

「リンガフランカとしての英語」と「やさしい日本語」は共に、「非母語話者を配慮したわかりやすい言語使用」という点で、類似性がある。これらの概念を導入した後、教室内では「リンガフランカとしての英語」を使用し、市民グループとの学外フィールドワークでは「やさしい日本語」を使用することで、部分的バイリンガル状況を取り入れた。

その後、留学生の出身地域は多岐にわたるだけでなく、多言語社会で複数言語を身につけている者が多いことから、当クラスでそうした多言語資源をもっと活用できないかと考えた。複言語主義の基本理念のうち、「どのレベルであっても、個人の言語レパートリーとする」、また「どの言語も等価値である」(Council of Europe 2001)という特色は、すなわち、部分的な習得レベルの言語であっても、言語レパートリーの一つとして他言語と等しい価値を持つことを意味している。よって、書き言葉や文字を分析することなど、一部の言語スキルのみを扱うことも、複言語資源の活用と捉えることができると考え、二つの複言語資源活用型グループプロジェクトを導入した。

一つ目のプロジェクトは、自分たちの知っている言語(英語、日本語以外)の紹介で、興味深く、特徴的であると思われる表現を、フィールドワークの際に市民に紹介することである。二つ目は、言語と文化が強く結びついていると考えられる例(例えば日本語の敬語や、「すみません」が謝罪と感謝の両方に使われることなど)を検討するグループプロジェクトで、グループメンバーの少なくとも1人が知る言語を2言語以上(英語を除く)選び、同じ軸で比較分析する課題を課した。「文法軸」、「語彙軸」、「ことわざ軸」などから各グループが選んだ。

3. 学生の気づきや学び

毎授業後の振り返り、レポート課題、コース終了後のグループインタビューをデータとし、分析した。部分的バイリンガル状況では、母語話者、非母語話者という立場が入れ替わり、複数の立場を経験することで、「言語調整を行う」意識の育成が見られた。複数言語使用の言語空間が生じることもあったことがわかり、平等な参加への意識の醸成は、ある程度出現したと考えられる。多文化クラスでは、使用言語を一つに限定することによって言語的優位性の差が生じる不利益よりも、むしろ複言語資源を活用することで、心理的な豊かな言語コンテキストを創り出す可能性がある。言語と社会のあり方への示唆が、ここに縮図のように現れているのではないかと考えられた。

¹ 詳細は『複言語・多言語教育研究』No.11 (2023) に掲載予定。